

〈資料〉

「市場と僧院：南アジアと東南アジアにおける交易 ディアスポラ・マナンギー」の紹介（後編）

高田 峰夫・山本 真弓

（受付 2014年5月30日）

ii) 『市場と僧院』（要約的紹介）：続²⁷

はじめに

I 外国で結びつくための拠点／拠り所

①交易に従事する者たちの共同体

交易するディアスポラ

歴史的背景～移りゆく交易ルート

行商

「身を守る」ための費用

A Funduq

②マナンギーの宿場

始まりの頃～現地のパトロンたち

ホテル、そして宝石卸売り業者が提供する寄宿舍

現地女性と結婚する

II ひとつの土地での経済循環、そして地域と地域をまたぐ経済循環

③移動から定住へ

地元の生産品

他所者との結婚と、文化的他者を包摂する親戚関係

④ネワールの交易従事者

2組の兄弟

雲南出身の妻と現地生産物（以上、前編＝前回）

⑤ネパールへ、再投資（以下、後篇＝今回）

カトマンズで

マナン渓谷で

交易か、信仰か～揺れる心

III 郷里で結びつくための拠点／拠り所

⑥資力と労力の提供、心の安らぎのために

27 本稿は、「市場と僧院：南アジアと東南アジアにおける交易ディアスポラ・マナンギー」の紹介（前編）」（『広島修大論集』53-2（2013））の続編である。今回は、要約的紹介部分の要約を山本が担当し、その修正と注記、及び、解説部分を高田が担当している。注記について、前回記したものは、今回は省いた。なお、本稿は科学研究費（基盤研究B）「タイに陸路で渡ってきた南アジア系及びミャンマー系移民：地域研究の新たな地平を拓く」（代表：高田）の助成を利用した研究の一部を成す。

徳を積む象徴的行為

ナンディになること～徳を積む行為のひとつ

個人、世帯、そしてひとつのポリス

⑦共有財の蓄積～仕事と遊びのために

メタ祭～村をあげての賭け事

ピクニック～制度化された家族の集まりと確認の場

お宅訪問は義務

II ひとつの土地での経済循環、そして地域と地域をまたぐ経済循環

⑤ネパールへ、再投資

交易のために各国をまわった後、一時帰国し、再び交易に出る。そんな人生に終止符を打って、ネパールに定住する人びとがいる。カトマンズに住む人びともいれば、故郷のマナン渓谷に住む人びともいるが、カトマンズに住む場合、そこで何をするかは、これまでの交易でどれほどの資金を蓄えたかに左右される。資本金が多ければ、ホテル業、観光業、不動産業や、野菜の種子の輸入業などが選択肢にある。

なぜ交易を辞めるかという、この仕事には非合法ビジネスであるがゆえの危険が伴うからである。命の危険に晒されることもあるし、外国で獄中に繋がれることもある。実際、外国の刑務所で命を落とした者もいる。

さらに非合法の金の取引で稼げたのは1990年代初頭で終わった。というのも、インドが金の輸入制限を撤廃したためである。もっとも、金でなくとも、宝石や工芸品であっても、基本的に非合法ビジネスである以上は危険が伴うことに変わりはない。したがって、資本金を貯めて合法ビジネスに切り替えるのだ。たとえば父親が資金を貯めて息子がカトマンズで投資するというように、切り替えが世代をまたぐこともある。あるいは、稼いだ資金で息子に教育を受けさせ、まったく別の道を歩ませることもある。ただし、マナンギー共同体のなかでは教育の効用について賛否両論あるのも事実で、交易については父親や親戚の年長者などから見よう見まねで学ぶ。

ネパール経済の文脈でマナンギーの交易活動を見た場合、彼らは国家に多額の外貨をもたらす存在である。1970年代以降のマナンギーの投資は目覚ましく、特にカトマンズのタメル地区²⁸にはマナンギーが経営するホテルが数多い。この他にも彼らは、カトマンズからマナン渓谷へ行くトレッキングルートにホテルを建てたりしている。

では、マナン渓谷に定住する場合についてはどうだろうか。マナン渓谷は降雨量が少なく、食糧が十分ではない。そのような地域へあえて帰村する理由は何だろうか。カトマンズを好む者が多いのは事実だが、そうは言っても、マナン渓谷は故郷である。マナンギーの文化が

28 タメル地区はカトマンズで外国人バックパッカーが集中する地区。

根付いていて、インド・アリア系が多数を占めるカトマンズのような少数派の悲哀を味わうことはない。しかも、空気も水もきれいだ。このような故郷に帰ってくる理由はさまざまだが、たとえば、交易がはかばかしくなく資金が不足している場合や、交易中に困難におつかった場合があげられる。後者について補足すれば、長年一緒に交易してきた相方が亡くなったり、投獄等の嫌な経験に遭遇した場合などだ。あるいはまた、もともと村に何がしかの土地をもっていたり、そもそも交易自体が性格に合わず全く別の人生の選択肢として僧院へ入ったりもする。

一方、カトマンズを故郷だと感じるマナンギーも少なくなく、特に若い世代に多い。実際、マナン渓谷に住む者よりもカトマンズに住むマナンギーの方が多く、共同体自体が渓谷からカトマンズへ移ってしまっているのだ。すると、故郷もまた渓谷からカトマンズへ移ったと言えないだろうか？ 故郷とは、土地ではなく、仲間が大勢住んでいる場所なのだ、と。つまり、仲間こそが故郷なのである。すると、バンコク、クアラルンプール、シンガポールを故郷と感じる者が多いのも肯ける話である。

年齢を重ねながら交易の経験を積んでいくとき、マナンギーの心は、信仰か交易か、という両者の間を揺れ動く。人生が社会的経済的そして精神的に満たされるために、だ。交易に携わった後、信仰生活に入る者もいれば、もっと早い段階で一中には、わずか8才で一僧院へ入る者もいる。僧院へ入る者の多くは交易に嫌気がさしてのこと。ただし、信仰生活へ入るのも、ネパールで事業を始めるのも、多くは国外での交易活動に携わった後の選択肢である。様々な条件下で、交易と信仰の間を行きつ戻りつする者もわずかに存在するが。

マナン渓谷で出会った3人の話の紹介：

(1) チェサン・バ

1922年生まれで9才から牧夫をして働いていたが、18才でカルカッタへ出かけ、工芸品などをアッサムのアメリカ軍基地に売ろうになった。第二次世界大戦中のことだ。「アッサム、ビルマあたりではしょっちゅう日本軍と米軍の戦闘があって爆撃の音をよく聞いたよ」。その頃は毎年、インドとマナン渓谷の往来だった。マナン渓谷に住む家族に穀物やなんやかや届けるために。それから10年ほどビルマで宝石の取引に従事した。モゴでシャン族の宝石の売人と親しくなり、彼から仕入れてビルマとタイの国境の町タチレク²⁹で、タイ商人に売る。こういう仕事を長年続けていた。1950年代にラングーンにタイ大使館ができて、ネパールのパスポートを手に入れると、ネパール人としてラングーンとバンコクを往復するようになり、後にタイのパスポートも入手した。それで、タイの中国人街に活動拠点を移したが、その後

29 タチレク (Tachilek) は、ビルマ側の国境に接する町。タイ側はメーサーイで、そのまま南に下るとチェンライに至る。ビルマ・タイ間の主要な交易ポイントの一つ。

もラングーンでシャン族の宝石売人から仕入れを続けた。ラングーンに3日間だけ滞在した後、バンコクやマレーシア、シンガポールで売るという商売だ。

1962年のクーデターのとき、ビルマの宝石採掘場で稼ごうと思っていた彼と48人のマナンギーは、宝石をこっそり国外へ持ち出すことにした。方法は次のとおり。二重底の籐の鞆を作り、そこに入れて運び出す。(作り方の詳細は省略)。49人分の宝石とカルカットから来ていたマルワリ商人³⁰の20万ルピー相当の宝石を隠した。うまくいったらマルワリから4万ルピーをもらう約束だ。モゴからマンダレーまでバス。マンダレーからは徒歩でナガランドのインド国境まで行き、そこを流れている河を渡った。橋には国境警備員がいるし、河は首までの深さ。流されないようにするため、28人が二列になって互い違いに手を繋いで進む。ナガランドからマニプールに行く道中はさらに厳しい取締があったが、ナガランドの村人と一緒に食事をして親しくなることで、そこが密輸村であることを知った。1,500ルピーを報酬にして協力を得ることにした。村の3人がマナンギーの荷物を州境まで運んで、マナンギーは手ぶらで歩いていく。徒歩でたったの3時間の距離だが、運ぶのに4日かかるという。信用することにする。賭けだ。マニプールのディマプールという町で待ち合わせだ³¹。4日後の夕方4時、時間どおりにナガ³²のポーターが現れた。荷物を受け取る。チェサン・バの推測では、ナガのポーターは荷物の中身が宝石だとは露ほども思っていなかっただろう。マルワリから約束の4万ルピーを得て、48人で山分けした。

「文化によって規定される論理」(Tambiah1985)³³というものを使ってマナンギーが共同体維持のために重要な価値をどのように具現化しているかを、チェサン・バの話は示している。マナンギー文化によって規定される論理とは、みんなが力を合わせて得た成果は、各自の能力や貢献度の違いにかかわらず、平等に分け合うということ。つまり、マナンギー共同体を維持するのに重要な価値のひとつに、平等、あるいは平等に分け合う、ということがある。

チェサン・バは現在80才で、マナンへ帰ってきて40年近くになる。ずっとゴンパの管理人

30 マルワリ商人は、インド西部のラジャースタン州西部、マルール地方出身の商人。いわゆる商業民族として、インド国内のみならずインド洋海域世界で広く知られている。

31 この部分は記述が怪しい。ディマプールはナガランド州西部のアッサム州との境に近い町である。また、現マニプール州はナガランドの南側に位置するため、わざわざ一度ナガランドに入ってからマニプールを経由し、再び北上してナガランドに入り、ディマプールまで行くというのは不自然である。マンダレーから「徒歩で」ディマプールに行った、というのが正しいなら、恐らくは、マンダレーから北西にマニプール州のインパール方面に向かい、そこからナガランド州に北上してディマプールに到達した、と考える方が自然ではないか。

32 ナガランドとその周辺には「ナガ」系の人々が多く居住するが、一口に「ナガ」と言っても、その実態は多様であり、一概には言えない。この部分の記述だけでは、それが果たしてどの集団の人を指すのか、判然としない。

33 Stanley J. Tambiah, 1985, "Culture, Thought, and Social Action: An Anthropological Perspective", Harvard University Press.

34 ゴンパはチベット仏教僧院。

として掃除などを欠かさない³⁴。彼が管理しているゴンパはマナン渓谷でもっとも古く、500年以上前に建立されたとか、いや1000年になるとか言われている。修繕費用はカトマンズで集めた基金だ。なかに飾られているタンカは彼がバンコクから持ち帰ったもの³⁵。1960年のことだという。

チェサン・バの話は、「マナンギー文化によって規定される論理」と「共同体維持に重要な価値」を物語っている。つまり、力を合わせることで、良きにつけ悪しきにつけお互い様であること、そして善意。とはいえ、この価値が裏切られることもある。すると、怒りは大きい。再び、チェサン・バの話。

ナガがこっそり持ち出したビルマの宝石をチェサン・バと友人たちがカルカッタに持っていったときのこと。食べ物を買うお金もなかったので、友人たちがシンガポールから腕時計を売りにやってきたマナンギー数人に宝石を売った。するとシンガポールから腕時計を売りにカルカッタに来ていたマナンギーは、カルカッタで宝石を買値の5割増しで売り払った。そして、その利益でシンガポールからさらに腕時計を仕入れたのだ。チェサン・バによると、これは「裏切り行為」である。もしカルカッタに腕時計を売りに来た彼らが、偶々入手した宝石をシンガポールにもって帰って売り、それで利益をあげるならば、それは正当な行為だ。シンガポールに運ぶコストを支払うわけだし、シンガポールの市場についての知識や情報を駆使したうえでの行為だからだ。

共同体内部の個々人の評判は、この種の行為に対する制裁として機能すると言える。しかし、チェサン・バはそうは言わない。「バチがあたる」という。その実例を彼は紹介する。自身の経験だ。ビルマから戻ってからも彼はマルワリ商人のような買い付け人に売るべく、ビルマから宝石を持ち出す他のマナンギー2人の手伝いをしたことがあった。二重底の壺を作ってやったのだ。それを使って1人当たり2万5千ルピーを稼いだのに、チェサン・バには一銭も寄こさなかった。で、彼はカーリー寺院で呪いをかけたなら、一人が血を吐いて死んだので、びっくりしてもう一度カーリー寺院で許しを乞うた。すると息を吹替えしたのだという。その男は以後、隣村のゴンパで毎日瞑想しているらしい。

どんなに嫌な奴であっても、人を傷つけることはしてはいけない、という道德倫理がマナンギーにはある。ビルマから戻ってからも1964年までチェサン・バはインドとネパールの間で交易を続けていた。それから40年近く、ゴンパに関するすべてを引き受ける暮らしをしている。祭儀の準備、修理修繕などだ。1980年代半ばまで彼は村長だったし、その後は県知事も務めた。彼はそれを誇りにしている。私が会ったときは村の郵便局で集配をしていた。

35 タンカはチベット仏教の極彩色の掛け軸で、マンダラ等から題材を取ることが多い。

(2) チャブン・バの話

(著者は彼の娘でカトマンズに住むマナンギー女性から彼宛の手紙を預かってくる)。妻と障害をもつ息子と 3 人で暮らしている。娘は 3 年前までここで暮らした後、結婚してカトマンズへ移った。

チャブン・バは 19 才で父親になった。最初の妻はシロンで長女を産んでいる。シロンで彼らマナンギーの男たちは妻子を置いてインドや東南アジアに交易に出かけた。シロンにはマナンギーがたくさんいて、マナンギー横丁と呼ばれる場所もあり、安心して妻子を置いていくことができたのだ。マナンギーは交易に出るとき、家族を他の家族と一緒に置いていく。孤立させないのだ。チャブン・バはシロンからシンガポールへ行って、3 年滞在し、友人がカルカッタ港から引き上げた荷をシンガポールで売っていたので、彼に頼んで家族に送金していた。彼らはビルマから宝石を、東北インドからは葉草やジャコウ鹿などを持ってきた。宝石に引き寄せられてビルマまで出かけていくことができたのは、第二次世界大戦後のことだという。

「メイミョーで暮らしたんだ、暮らしやすかったからね。ネパール人、ゴルカーリー、マナンギーが大勢いたよ³⁶。牛がいっぱい飼われてた。だから牛乳はただで飲めた。でも俺はモゴに行った、カチン族が持つてる鉱山で宝石を買うためにね。友人から 2 千ルピーずつ集めて宝石をまとめ買いして、みんなに配った。2～3 日しかいないようにしていたね。すぐ買ってすぐに売る。ラングーンに持って行って、そこで贖物の石と混ぜて売るんだ。そうしないと儲けがないから。河の近くの市場でも売った。イギリス人やジャワから来た連中や、オランダの会社の奴らとか、一度に大量に売りつけて、2～30 万ルピーは稼いだよ。ビルマ人だって、俺がどこからそんなに宝石を仕入れるのか、知らなかったね。」

ビルマでほろ儲けしてたので、彼は 2 年ほどそこにいた。ビルマ政府が宝石の売買を統制下に置いたときでさえ、こっそり買い付けに忍び込んでは、カルカッタに船で行って、そこからシンガポールやマレーシアに持って行ってた。たぶんチェサン・バが二重底の壺かなんかを作って手伝ってたんだろう。チャブン・バの交易は、北ボルネオからタイにまで及び、シロンの家族に送金を続けた。この調子だと、ずっとこのままシロンの家族の元へは帰らないんじゃないかと思うような勢いだったという。

実際は、チャブン・バは交易を辞めて 30 年になっていた。再婚した妻と一緒に暮らしてい

36 広義には全てネパール人。しかし、ここでの書き分け方から考えると、「ネパール人」=平地系のカースト・ヒンドゥー、「ゴルカーリー」=(マナンギー以外の)山地系/チベット系諸民族、または退役グルカ兵とその家族、等と推測される。

る。妻もチャブン・バも高名なラマ・ロプサンの弟子で、ロプサンのゴンパの近くに小さな家を建てて住んでいる。他の弟子たちもそうだ。弟子たちの家は互いに繋がっており、ロプサンの住居を囲むようにして建っている。マオイスト³⁷から逃れてきたネパール人一家に土地を貸すことでいくばくかの現金収入を得ている。この信者の集団はこうして一日の大半を瞑想などをして過ごしているのだ。

チェサン・バの人生とチャブン・バの人生は共に同じ時代をカルカッタ、東北インド、ビルマ、シンガポール、マレーシアと交易しながら渡り歩いた。第二次大戦前後のことだ。その後は両者共に比較的若い40代で交易から退いている。ブジュンとカプリ³⁸が引退後カトマンズでホテルや不動産に投資したのとは異なり、ふたりはもっと静的で禁欲的な生活を選んだ。しかし、4人ともに共通して言えるのは、信仰に身を捧げていることだ。前者は物質的貢献を通じて、後者は人生そのものを信仰に捧げることで。さらにもっと早く信仰に身を捧げる者さえいる。

(3) ラマ・タシの場合

ラマ・タシは長年村の僧をしていたが、その前はタイに何度か交易に出かけてもいた。もっともあまりにも前のことで、それを知る者はほとんどいない。今は同じく信仰生活を送る妻と、尼僧になっている娘と孫と共に暮らしている。娘と孫は彼ら夫婦の面倒を見ている。ラマ・タシがバンコクに行くと、ネパールとタイの間で交易品を運んでいたのは数ヶ月だけだったが、彼にとってはさして重要なことではないので、当時のことはあまり思い出せない。その後、結婚してすぐに高名な僧侶の下で学ぶようになる。ほんの二ヶ月前まで彼は村人の家で行う儀式や村全体の儀礼を他の僧と交代で担っていたが、高齢のため退いたばかりだ。彼の世話をしている同居の娘のほか、台湾でやはり尼僧になっている娘もいる。

息子三人は全員カトマンズでビジネスをしている。息子たちが彼に送金しているのだ。

マナンギーは交易コミュニティとして知られているが、実は、男全体のかなりの人口が僧になる。尼僧はこれより少ないものの、だからといって無視できる数ではない。各世帯から少なくとも一人は僧院に入るのだから。

多くの場合、長男が老親の面倒をみるので、次男以下がこの役割を担う。したがって、女の子の方が人生の選択肢が多い。「弟たち」は僧院に属するものと考えられており、相続した財産も僧院に帰属する。そこで、マナンギー社会全体で彼ら僧という不労人口を支えるべく余乗を生み出さなくてはならない。

37 マオイストは、毛沢東主義を自称する左派集団。一時は武装闘争路線でネパール国内の広い地域を影響下に置いたが、2006年の停戦後は政党として議会に参加し、首相を輩出するまでになっている。

38 いずれも人名。ここでは事例省略。

次男をサンガへ差し出す慣わし

これは徳を積むという行為とされている。ただし、今日では必ずしも次男であることはなく、本人の意志をより尊重する。なので、子供の動機づけは両親の役割となっている。僧侶が性に合わなくて逃げ出したとしてもマナギー社会では再度受け入れられるようになっている。

(1) カルマ（テンジンの弟）の場合

カルマは、今はバンコクで銀の卸売をしているが、かつては見習い僧だった。「僕は勉強嫌いで悪ガキだったから、母親が僧院へ送り込んだんだ。9才のときだ。兄たちはすでに交易に出ていた。僕には僧院の暮らしは厳しすぎて、ある日、逃げたのさ。ポカラの僧院だった。カトマンズへバスで逃げた。5年もいたのに、ちっとも勉強しなかったよ。僧院からの電話で母は僕が逃亡したことを知って、あちこち探し回ったみたいだ。僕は長兄の家に行ったんだ。長兄は僕を見てびっくりしたけど、すぐに抱きしめてくれたよ。で、バンコクに連れてってくれた。ビジネスを手伝ったんだ。でも、宝石の取引は難しかったんで、兄が銀の工場を始めたとき、そこを手伝うことにしたんだ。」

その後、カルマは兄の援助で自分の店をもつようになる。親よりも兄弟が重要な役割を果たしたケースだ。

(2) ムキヤとサンジャイの場合

僧院からの逃亡はムキヤの心に傷を残した。彼は次男坊。11才のとき、父親が修行を勧めたが、気が進まなかった。13才のとき、再度、父親に勧められ、渋々従う。だが、休暇に帰宅すると、戻りたがらない。両親の説得も虚しく、ついに力づくで僧院へ送り返さなければならなかった。両親は院長にあって、くれぐれもよろしくとお願いするが、彼は拒否。母親が泣き出すに至って、仕方なく残ることにするが、5日後、脱走。この段になり長兄のスレシュが両親を説得した。これ以上、彼に強制することはできない、と。その後、スレシュの下でビジネスを学ぶ。

一方、ムキヤの弟サンジャイは8才で僧侶になる決意をした。(僧に)なりたくて仕方がなかったの、両親はちょっと早いと思ったが、決心した。彼は優れた資質を見せ、カリンボン³⁹で学ぶ機会にも恵まれる。15才で、古典のチベット語、口語チベット語、英語に精通。5才から8才までの若い僧に英語と数学を教える。徳の高い僧侶の生まれ変わりであるリンポチェと共に学ぶという榮譽を得る。

39 インド西ベンガル州ダーージリン県の中心都市の一つ。多数のネパール系住民がいる。

(3) ロプサンの場合

彼は経済的理由から僧院を出なくてはならなくなる。両親が亡くなったので、姉と弟の面倒を見なければならないのだ。やむなく交易を始める。今はタイのチャンタブリで宝石の交易人をして稼いでいる。弟も修行者だ。

俗人のコミュニティが一丸となって僧侶という階層を支える場合と、僧侶となった家族の者を世帯で支える場合とがあるが、ロプサンの場合は後者だ。これはサンガの規模で決まる。カトマンズではコミュニティ全体で僧侶階層を支えられるが、マナン渓谷では、特に昔は無理だった。だから、各家庭で僧となった家族を支えていたのだ。

女たちは結婚する前、交易に従事する。現在40代～50代の女たちの多くは、昔、バンコク、香港、ネパールと行ったり来たりして、服や金の交易をしていた。結婚したら止めるケースもあれば、両親に子供を預けたり寄宿学校に入れたりして、夫と共に交易に出る者もいる。しかし、多くの女たちはカトマンズに残って、世帯主としての役割を担う。信仰生活に入る者もいるが、男より自由であり、尼僧になるのは勉強好きな者だけで、だいたい12～15才くらいの時に入る。また、彼女らはほとんどの場合、人生の進路を変えることがない。

途中で僧院を出た女性に一人だけ出会ったことがある。彼女の場合、師に落胆してのことだった。バンコク経由でアメリカに渡り、今はお手伝いのアルバイトをしながら勉強している。

女たちは交易や信仰生活以外に、マレーシアやシンガポールなど国外の宿場を運営する上でも重要な役割を果たしている。結婚後は、育児と家事、そして親戚や友人・知人などの「つきあい」に忙しい。「つきあい」の担い手として彼女たちがいかに重要かは次章で扱う。

まとめ

マナンギーが交易から定住生活へ移行するとき、これまでの稼ぎをどこに投資するか。外国に定住する場合は、銀製装身具工場や縫製工場、宝石加熱（加工）工場（gem heating factory）⁴⁰など。カトマンズの場合は、ホテルやカーペット工場、旅行会社、野菜の種の輸入ビジネスなど。マナン渓谷の場合は、ロッジ建設、家畜購入、僧院などの施設の改装改築に費やす。

元手があろうとなかろうと「徳を積む」方法は色々ある。寄付したり額に汗して働いたり。これは懐具合と、（本人が）長男か次男以下かということ、個人の志向性にもよる。「徳を積む」うえで、カトマンズとマナン渓谷は特別な場所である。こればかりは外国のどんな土地

40 宝石加工の一種で、主に宝石を加熱することで、発色を良くしたり染色しやすくする加工を行う工場。

もって代わることができない。

カトマンズとマナン渓谷の様々な活動を支える資金は、外国での交易と送金による。マナン渓谷は地理的に離れていても決して孤立していない。人々はマナン渓谷とカトマンズと外国を頻繁に往来するからだ。

マナンギーはコミュニティのために資金も労働力もきちんと貯めている。交易者たちもときには数ヶ月にわたって仕事を休んで村へ帰り、村のつきあいやお務めを果たす。資金も人手もアイデアも、村をいったん経由するのだ。

Ⅲ 郷里で結びつくための拠点／拠り所

外国にいるマナンギーがときどきとはいえカトマンズへ帰るのは、もちろん家族がいるからだ。それ以外に二つ理由がある。一つはマナンギーが共同体に対して果たすべき義務を遂行するため、もう一つは共同体をあげて執り行われる祭事のためである。したがって、マナンギーたちは年間の暦を見て注意深く交易計画を立てる。多少の経済的利益を犠牲にしてもマナンギーとしての義務を果たすべく帰国するのは、物質的価値の限界を知っているからだ。物質的価値をもっと永続性があり意義あるものに変えるためなのである。

では、価値の変換はどのような行為を通じて、どのような価値へと変換されるのか？前者について言えば、行事・祭事への参加を通してであり、後者については、共同体を持続させるのに重要な価値へと変換されるのである。具体的には、社会的集まりと賭け事に膨大な出費をすること、徳を積むための出費を惜しまないこと。最終章では、このような行為を可能にする共同体のメカニズムに焦点を当てる。

国外で慎ましく暮らすマナンギーが、その慎ましさをゆえにカトマンズでは派手な出費が可能なのだが、それはマナンギー経済が成長し続けることといかなる関係にあるのか。カトマンズで派手な出費を惜しまないのはなぜか。

マナンギーは交易で得た余剰を社会的および宗教的目的（行事と祭事）のために費やす。外国での交易で余剰を生み出す一方、カトマンズでは生み出された余剰を再分配し、精神的に価値あるものへと変換していくのだ。したがって、国外の結節点と国内の結節点がどのように分布しているかを示すことで、共同体内のふたつの経済（国外と国内）の結びつきがわかる。

⑥ 資力と労力の提供、心の安らぎのために

カトマンズではほぼ隔月になんらかの行事／祭事がある（例えば Ngungne と呼ばれる断食）。このような行事／祭事のために毎年、かなりの金額が貯蓄に回されるのである。

マナンギー共同体には祭事に協力するための非常に洗練されたシステムが存在しており、

世話役の役割を果たすことは非常に大きな徳を積むことになる。世話役となる世帯は12年前に決められ、たとえ経済的に貢献できなくとも、労働力や時間の提供という形で貢献できるようにもなっている。そして、これらはいずれも等価値に徳を積む行為と見なされているのだ。

お金はたとえ貯め込んでも死んでしまえば無価値となる。そのため、喜捨することで徳を積むのである。徳を積むとは、現世と来世のあいだに横たわる時空を超える行為であり、来世という概念の前で、この世での富は万能ではない。

したがって、交易で得た富を、時空を超えた価値あるものとするために、マナンギーは祭事に参加し、何らかの役割を担い、可能ならばその世話役となるのである。Ngungne 以外にもたとえば Mani Dungur や Monlam。どれも似たような大祭事だが、これら以外にも大小さまざまな宗教行事があり、通常、カトマンズのゴンパで行われる。ゴンパはマナンギー共同体の蓄えで建立されたものだ。ネパールそしてインドには、他にも共同体の蓄えで建てられた宗教建造物（モニュメント）が数多くある。徳を積むという行為は個人単位で行われるだけでなく、共同体全体の行為としても行われるのである。

その目的が宗教的なものであれ社会的なものであれ、マナンギー共同体では「与える」という行為はすべて肯定的にとらえられる。「与える」という行為を行なった者は社会的地位を得るのだ。したがって、人はそれを追求する。その結果、徳の高い人、経済的にも安心できる人、そして、心が寛い人として他者への影響力をもつことにもなる。こうして「与える」人は社会関係を左右する力をもつようになり、その結果、金の貸し借り、信頼関係・協力関係の構築が共同体内で活発になるのである。

祭事の世話役を担う世帯のことをナンディ（Nandi）と言う。たとえば、Ngungne の場合、チベット暦に従って冬に行われるが、それを担うのはナンディとなった6組の夫婦である。彼らは資金を出し合い、労力を提供し合う。ナンディの選出はかなり前に行われるが、それは負担がただならぬものだからだ。そうであっても、ナンディになりたがる者は多い。

経済的負担はひと世帯につき3万ルピーだが、これは中級クラスの公務員の一か月の給与相当であり、宝石の交易に使う投資額の4～5%だから決して安いものではない。加えて労力の提供もかなり大掛かりなもので、とても自分たち家族だけでなんとかなるものではないため、ナンディになると自分達で協力者を探し求めなければならない。多くの場合、親戚を頼るが、この協力者のことをサーティ・ガルネハル⁴¹と呼んでいる。

では、ナンディがやらなくてはならない仕事にはどんなものがあるのか。祭事を執り行う僧と連絡を取り合い、僧院で働く人々をまとめあげ、料理人を雇う。祭事の最中はお金の出

41 ネパール語で「サーティ」は友達、ガルネは「する」という動詞の活用形、「ハル」は複数を表す接尾辞（山本注記）。

入りを管理し、僧院を日々清潔に維持し、参加者に食べ物や飲物を用意する。特に、親戚や友人の協力を必要とするのは、僧院の清掃と飲食物の準備だ。

祭事への参加は徳を積む行為であるが、祭事そのものに参加できずともナンディとなることもまた徳を積むことなのである。なぜなら、ナンディとして人びとに徳を積む機会を提供することになるからだ。同様に、サーティ・ガルネハルになることも徳を積む行為なのである。ちなみにサーティ・ガルネハルとは、文字通りの意味は「友達付き合いをする人びと」で、文法的には不正確なのだが、マナンギーが口語として用いている表現である。彼らの社会的文脈に即して言うならば、任務の遂行を助けるために駆けつける友人たちを指す。すなわち、助ける者と助けられる者との関係を表す言葉でもあり、それは個人と個人のあいだの助け合いであると同時に、助けた者は自分の番が回って来たときには助けられる者となるという意味で、個人と共同体の間での助け合いの関係でもあるのだ。そして、この関係性の網の目のなかにいることこそが、マナンギー共同体の一員であることの証となる。

ナンディの男は祭事が始まった直後の朝 5 時半にゴンパに到着し、飲物を準備して暖かいレモンティーを供する。ナンディの女と手伝いの女たちは 6 時までには来て、やかんをもって 2 階へ行き、すでに断食して 36 時間になる参加者にお茶を配る。お茶を配り終えてからも、お湯をもって回る。それから 7 時に朝食。これは力仕事なので男がする。

11 時を過ぎて再度の食事。食事は 2 日に 1 回で、(食事がある日も、7 時と 11 時の) 2 回のみ。食事時は再び忙しい。この後、夜の 9 時に祈りの祭事が終了するまで何度も飲物の準備を繰り返す。それから掃除。これが 18 日間続く。

このような過程で、マナンギーは共同体内の他者を認識し、承認を与え、評価を下す。そして、地理的には散らばって住んでいるにもかかわらず、共同体内部での評判と相互依存を育てていくのだ。

たとえば、サーティ・ガルネという労力を提供しあう行為によって、否応なく親戚が集まることになり、その過程で、新しく姻戚関係を結んだ者が紹介されることになる。すなわち、誰が共同体内の者で、誰が誰とどういう関係にあるか、という、いわば親族関係図が常に新しいものへの書き替えられることになるのである。具体的には、ある者がそこに姿を現しているかいないか(不在かどうか)が共同体の境界線を引くことになり、姿を現す頻度によって関係性の濃さ(距離)が示される。

わたし(=著者)自身の経験で説明すると、マナンギー共同体に関与するようになってしばらく経ったある時、ナンディを務めた友人の手伝いとして、お茶を配って回っていたときのことだが、ひとりの年配の女性がわたしに「あんたはどこの嫁さんかね?」と尋ねると、彼女の横に座っていた女性がすぐに「みんなの、だよ。タイから来てるんだ」と応えた。このような対応は、固く編みあげられた共同体が常に共同体外の者と関わりながら新しいメン

バーを迎え入れているような場合に見られる。つまり、誰が共同体内に居て、相互にどういう関係にあるかを正確に理解するためのものなのだ。わたしは祭事で手伝いをしていたおかげで、マナンギーの村に行っても、シンガポールやペナンへ行っても、何の自己紹介もなしに迎え入れられた。

このように集団で徳を積む行為を行うと、互いの懐具合や心の寛さ、徳の高さが明らかになる。つまり、集団的行為はもはや私的な営みではなくなるのである。祭事の間中、マナンギーは飲物や食べ物の提供を通して献金ができることになっている。ゴンパの1階には会計事務所があり、ナンディの男が寄附を受け付け、記録に取っている。昼食10,000ルピー。果物3,000ルピー。ミルク2,900ルピーといった具合だ。1回のお茶が1,500ルピーで、1日に6回。これが最も少ない献金額となっている。とはいえ、決して安価ではない。外で飲めばお茶1杯8ルピー、林檎1キロ70ルピーなのだから。要するに、実際の出費よりも高い値段がつけられているのだ。こうした寄附は毎回、名前を公けにすることで皆に知れ渡るようになっている。なので、数日に渡って、いろんな形で寄附を行うと、その度ごとに名前が告知されることになるのだ。

毎日午後には、ナンディの男が集まって、献金者のリストを作成する。名前の横には出身地や、国外在住者の場合は国名と、寄附の行き先、すなわち多くの場合は両親の名前が記される。この作業は実に慎重に行われるのだが、それは、ほんのちょっとした誤りであっても大変な騒ぎとなるからだ。長いリストの最後にその日の寄附の合計金額が書き込まれる。毎日、2時半から4時まで、一番偉い僧侶がこのリストを読み上げる。マナンギーはこのリストに細心の注意を払って耳を傾け、聞き損なった場合は、ためらうことなく問い合わせる。

人々が互いに依存しあっている共同体では、このような情報はとても重要だ。一日の食事の寄附者のリストより、その日のお茶の寄附者のリストの方が長いのは、同じ人が何度もいろんな形で寄附するからである。

祭事の最終日には、自らを犠牲にして祭事の遂行に務めたナンディの働きが称えられる。ひとりずつ名前が読み上げられ、みんなから顔が見える位置に座り、白いカタ⁴²を僧から授けられるのだ。

このようにして、ディアスポラの共同体が国外で交易に従事しながら、経済的目的の達成のために互いに依存しあうということが可能になるのである。つまり、祭事の遂行はその大前提となる行為なのであり、同時に、共同体に生命力を吹き込む上で非常に重要な価値一寛容さ、相互依存、富一を作り出してもいるのだ。

徳を積むという集団的行為（祭事の遂行）は、マナンギー共同体内の社会関係を変容させ

42 チベット仏教圏で、相手に敬意と感謝を示すために贈る、肩にかけるための薄布。

ていだけでなく、ひとりではできないことをも可能にするという意味をもつ。各々の貢献度は能力によって異なるが、その成果は平等に各々に属す。それはひとりでは決して誰一人として成し遂げることのできない成果だからである。この方法は、外国で交易を行うときにも適用されている。

寄附は、祭事といった催しのときだけではなく、宗教的建造物を建てるときにも行われる。ルンビニにストゥーパ（仏塔）を建てるときにも行われた⁴³。このときには、わたしは献金者リストをカトマンズからバンコクに持って行って、テンジンに手渡すという役目を担った。テンジンはそのリストをバンコク、シンガポール、マレーシアなどに、ストゥーパの完成予想図と一緒に配布する。そこには、資金がどれだけ必要とか、プロジェクト全体の予算はいくらとか、細かいことも記されている。ストゥーパ建設という事業のためには、全員が財力に応じた応分の負担を求められ、負担額は全員が知るところとなる。このとき、私は献金リストと一緒に膨大なカタも運んだ。カタはいろんな種類のもので、それぞれ意味が異なる。銀のカタは多額の献金者に送られ、1枚のシルクのカタはテンジンのために用意されていた。20万カタの寄附をしていたからだ。この他にもストゥーパに名前が彫り込まれる。多額の寄附によって名前が知れ渡るのには名誉であると同時に、個人の霊のためにも好ましいこととされる。

以上、ⅠとⅡ（①～⑤）では、マナンギーがどのようにして富と社会資本を蓄えるか（物質的目標を達成するか）を見て来た。そして、このⅢ-⑥では、心の平安を得る（精神的目標を達成する）ために、蓄えた富と社会資本を貯める術を見て来た。これらから言えることは、マナンギーは地理的にどこかに固まって住んでいるわけではないものの、アリストテレスが言うところの「ひとつの社会（a society）」とみなしてよいのではないかということである。

マナンギー共同体では、世帯は重要な単位である。個人が交易を通じて地理的にばらばらになっても、世帯を通じ、ナンディという制度を通じて、互いに結びつきを維持している。世帯およびナンディという制度の重要性については次章でとりあげる。

マナンギー共同体にとっては、交易も信仰も個人的なことであると同時に全体にかかわることでもある。個人は全体のために尽くし、全体から利益を得る。全体から得られる利益は、必ずしも分割できるものではなく、共有財として残る。たとえば、国外にある交易の拠点は、協力関係や内部での交換行為によってマナンギー共同体に利益をもたらすだけでなく、共同体の外部と競争しても交易が続けられるような働きをしているのである。同様に、信仰とい

43 ルンビニは、ネパール南部の平地に位置する、仏陀生誕の地とされる小村で、仏教4大聖地の1つ。

う領域においても、協力共同は全体としてより大きな目標に達することを可能にする。ルンビニにあるマナンギーのストゥーパは、建設資金を出した個々人のものではなく、マナンギー共同体全体の共有物なのである。ルンビニにはネパールのストゥーパがひとつ存在するが、仏教徒共同体としてのマナンギーは自分達自身のストゥーパを所有する必要があったのだ。

マナンギー共同体は、社会的政治的経済的なひとつの集団であって、それは国民国家を跨ぎ、国境を超えた広がりをもっている。したがって、彼らの集まりは、信仰上のものであれ社会的なものであれ、彼ら独自の暦に基づいているのである。

⑦共有財の蓄積～仕事と遊びのために

ほとんどの社会は恵まれない人々のために、そして、ひとりでは作り出せないものを得るために、さらに、みんなが分かち合うべきもののために、何らかの術を見出しているものである。

かつて聞いた話を紹介したい。夫が交易をしていたあるマナンギー女性の話だ。彼女の夫が金の密輸で一年間牢に繋がれたとき、一家の働き手を失った彼女は子どもを養うために、小さな賭博場を開いた。親戚の者や友人たちがそこを訪れ、賭博で得た利益の15%を彼女に渡したという。人々が賭博に興じているとき、彼女は手料理で客をもてなした。そうやって夫が獄中にある間の糊口をしのいだという。この場合、賭博は共同体内のセーフティーネットの機能を果たしている。こういう粋な計らいは稀な例だが、賭博自体はマナンギー社会では普通の行為だ。共通の目的を達成するために人々が集まるときの口実にもなっている。

ネパール暦の一月（バイサーク）と言えば4月後半からだだが、この時期にマナンギーは僧院を賭博場に模様替えしてみんなが集まる。村ごとに集まって弓矢の腕を競い、その勝敗に賭ける。毎日、午前と午後、10時から2時までの大会で、参加は義務であり、欠席の場合は罰金が科せられる。世話役は4組の夫婦だ。なぜ、それほどまでに厳しく参加を義務づけるのか？ それはこの種の催しが共同体維持装置として必要な価値を生み出しているからだ。それは何かというと、【与えること】と【富を分かち合うこと】である。これは象徴的な意味においてだけでなく、極めて具体的に行われる。つまり、この種の催しが、あるいは、前章で述べたような祭りが、共同体がその構成員に対して行う貸付の資金を捻出するからだ。したがって、参加は義務であり、勝負で利益を得ればそこから15%の税金が徴収されるのだ。

この種の【交換】が行われるもっとも大きなレベルは村単位で、これは上述した弓矢大会が例であるが、一族単位で行われるものには、年に4回開かれる拡大家族ごとの集まりがある。祖父母のもとに皆が集まるのだ。そして、もっとも小さなレベルでの【交換】が行われる場合は、世帯間のもので、現金の代わりにビールなどの品物が行き交う。一見、異なった習慣のように見えるが、根底にあるものは共通している。つまり、価値の創造、ときにはもっ

と具体的な共同体維持に極めて重要な種々の条件を整えるためである。マナンギーが交易の旅から故郷へ戻るのは、単に祭事に出席して徳を積むためだけではなく、社交の場（社会的な集まり）に顔を出すためなのである。そして、この種の集まりは少なくとも年に5回はある。祭事のように、共同体あげての大規模なものではなく、規模は様々だ。規模が様々だということは、その規模に応じた知り合いができるということでもある。同時に資金の借り入れ額の多寡も加減できるわけだ。

歴史的には、マナンギーの村には Meetha と呼ばれる村をあげての弓矢大会が存在していた。この大会はおよそ5日間続けられる。祈りに始まって、試合となり、勝った組は100ルピーを、負けた組は200ルピーを支払って大会の出費に当てるという決まりだ。男たちが試合をしている間、女たちは食べ物をもってきて応援する。夕方、試合が終了すると、負けた組の奢りで夜通し食べたり踊ったりする。

Meetha は、圧倒的多数のマナンギーがカトマンズに住むようになって一度廃れたが、1980年代になってこれをカトマンズで復活させようとした者がいた。このとき、Meetha のやり方に変更が加えられた。Meetha の世話役はナンディが引き受けることになり、毎年4組の夫婦がこれを担う。村ごとに結婚した夫婦の名簿が作成されていて、この名簿は婚姻年月日と共に常に更新されている。事実上、共同体のセンスとなっているのだ。Meetha の世話役は、毎年、結婚したばかりの2組の夫婦と世話役を経験済みの2組の夫婦が組むことになっており、先輩夫婦が若い夫婦にやり方を伝えていくのである。

Meetha (弓矢大会) も Nyungne (祭事) も世話役となるのはナンディだが、そこには明らかな違いがある。祭事ときは任意だが、弓矢大会では結婚すると誰でもナンディとして労力を提供しなければならない。ここからわかるのは、結婚して所帯をもつことによって初めてひとりひとりが共同体の成員として認められ、義務と責任を負うことになるのだということである。

村で行われていた Meetha は弓矢大会だったが、カトマンズでは弓矢以外の競技も行われ、試合では必ず勝敗をめぐる賭けが行われる。18歳以上の男子は全員参加しなければならない、女子の既婚者も参加が義務づけられている。2週間続く Meetha への欠席には一日単位で罰金が科されることにもなっている。参加者は朝10時には会場へ到着していなければならない。

Meetha がどれほど重要かということ、あるときわたしが目にした光景から説明しよう。その年、友人の姉妹がサーティ・ガルネをやっていたので、その縁で手伝いに出かけていた時のことだ。数人の男達が僧侶の絵の前で誓いをたてることを強いられていたのだ。彼らはその前日の午後、Meetha を欠席していたので、ひとり400ルピーの罰金を支払っていた。聞くと、別の村の友人の結婚式に出席していたのだという。これは Meetha を欠席する理由として承認されるとのことだが、それが嘘ではないことを、男たちはこうして僧侶の絵を前

に誓っていたのだ。

このように Nyungne でも Meetha でも寄附や某かの支払いは、任意であれ義務であれ、実質的には避けようがない。実際、誰がどれだけ賭けたかは、誰がいくら寄附したかということと同様に、いろんな場面で頻繁に話題にのぼる。「おまえ、今年はあんまり遊ばなかったな」といったやりとりがあるのだ。なぜか。それは賭け金の15%が共同体の基金になるからである。そして、その基金で村に道を作ったり、ゴンパを建立したり、カトマンズに老人ホームを作ったりするのである。

マナンギーの子どもたちはこうした賭け事のなかで大人になっていく。大人は子どもに賭けを促し、教え、指導する。そうするなかで、【リスクをとる】ことと【リスクを分かち合う】ことを学んでいく。それは【国外で交易をするのに必要な態度】なのである。

賭けへの参加は個人に対して社会的名誉をもたらす。賭ける金額が大きければ大きいほど名声は高まる。それというのも、マナンギー共同体が、リスクをとることを前提に、そのリスクを分かち合うことで成り立つビジネスに従事しているからである。マナンギーにとって、金銭的な損失を気に留めず、喜んで与えるというのは、心が寛いことの表れなのである。したがってここでは、【賭けをすることは徳を積むことと同じ種類の行為】なのである。

マナンギーの子どもたちは小さい頃からリスクをとることを叩き込まれる。ただ、その有り様は特殊だ。個人的にリスクをとるだけでなく、みんなでリスクをとることも教えられるのだ。みんなでリスクをとった場合、その結果もみんなで分かち合う。

たとえば、Meetha で賭けをする。賭けに負けて家からもってきた資金が全部底をつく。すると、村の基金から一定金額が貸し出され、勝負は続けられる、といった具体だ。なので、Meetha ではナンディの男はみんな、お金が詰まった袋を背中に背負っている。この借金は翌日、あるいは行事が終わった後に、ナンディが回収してまわる。これもナンディの仕事のひとつなのである。もし回収できなかったら、村の代表者一団がその仕事に携わり、それでも回収できないとなると、翌年の Meetha で名前が公表される。そうなると、その人物はブラックリスト入りだ。もう二度と、共同体からお金を借りることはできない。こんなふうにして、Meetha のあいだ中、賭けが中断されることなく続けられるのだ。いわば、賭博浸けの状況が生み出されるわけでもある。

福引きも販売される。各世帯はその収入に応じてこれを購入しなければならない。たとえば、小さな土地を所有している世帯ならば、福引き5枚は買う必要がある。一方、借家暮らしであれば2枚で済むといった具合だ。これはいわば収入に応じた課税だと考えられなくもない。というのも、利益はすべて村の共通基金に行くのだから。さしずめ消費税であったり累進課税であったり、という感じか。

では、みんなでリスクをとる、とは具体的にどういうことか。弓矢大会を例に考えてみよう。

参加者は2グループに分かれて、みんなで賭け金を置く。カトマンズではどちらのグループも平等に500ルピーから1,000ルピーだ。勝ったチームは負けたチームの賭け金をグループのメンバー全員で分け合う。つまり、勝ちも負けもその結果については、メンバー個々の能力とは無関係に平等に分かち合うのだ。こういう経験を通してマナンギーが学ぶことは、【個人の能力差を甘受すること】、能力の違いによって貢献度が異なるという現実を受け入れることだ。グループへの貢献度に違いはあっても、【みんなが力を合わせて獲得した結果については平等に享受すること】を善しとするのである。とはいえ、特別な能力の持ち主への配慮も怠らない。際立って優れた者には賞讃を惜しまないのだ。Nyungne の際に、カタの色の違いで差をつけたように。

たとえばたった一本の矢が瞬時に勝利へと結びついたときには、勝負はその時点で終了するため、獲得した賭け金はすべてその矢を放った1人の選手のものとなる。そして、その選手の働きが賞讃されるだけでなく、チームの、そして共同体全体のものとして称えられる。すなわち、彼の矢で敗北したチームでさえも彼を讃えるのである。こういう場合、15%を村の基金として寄附した後で、残りはすべてみんなのために使い果たす。男たちにはビールを、女と子どもにはジュースを買うなどして。こうして、彼の働きは社会的に認知されるのである。

このように、みんなで力を合わせて達成したことについて、誰がどれだけ働いたか、ということは問わずに、みんなで平等に分かち合う、という社会においては、ある個人の著しい貢献はみんなが認め、みんなで讃える。そうすることで、緊張が走るのを回避するのだ。換言すれば、個人の能力をみんなで讃えることで、成果の共有を促すと言えるだろう。ここから、個人と集団との関係をどのように捉えるかということが窺われる。

以上までのまとめ。

1. 協力すること。協力するうえで、個々人の能力の違いを受容し、結果は能力とは無関係に平等に分かち合うこと。みんなでリスクをとること。誰かが原因でもたらされた不幸も受容すること。
2. 1の結果、経済的な損得に固執しないこと。あるいは、少なくとも執着する素振りは見せないこと。これは心が寛い徴であるためだ。人のためにお金を使うことにこだわりを見せるのは、しみつたれだ。一方、自分のためにケチるのはかまわない。たとえば外国へ行ったときなど。高級車で祭事や弓矢大会に乗り付けながら、しかるべく金額の寄附をしないというのは当惑ものだ。
3. みんなでひとつの目標に向っているとき、ひとりひとりの貢献度が違っていることは公けになるが、その成果は平等に享受される。

4. 1～3を前提に、誰もがひとりでは成し遂げられないことは、みんなで成し遂げることができる。その結果、共同体そのものが弾力性に富み、持続力のあるものとなって、リスクを伴うことにも果敢に挑戦するようになる。これは、徳を積むという信仰上の事業においてと同様、交易という経済活動においても見られることである。

短くまとめてしまえば協力と相互依存という言葉に尽きるが、その中身には以上に見たような意味が込められているのである。そして、他者への気遣い、持てる者の持たざる者への配慮は、福祉事業の展開という形で実現される。老人ホームの建設、救急車の購入、無料診療所の運営、学校建設、道路の敷設などがそれに当たる。

Meetha が2週間続いた後の最終日の午後、全員が僧院内に集まり、世話役を務めたナンディに感謝の意を述べ、名前を読み上げ、カタを授与する。それから次年度のナンディの名前が読み上げられる。そして、金庫番（プロが雇われる）が会計報告をするのである。報告書は全員に配布される。

会計報告書が明らかにすることは、以下の3点である。

1. 多くのお金が宗教的社会的事業に費やされている。
2. 共同体員1人1人について、どれくらいの富をもっていて、どの程度の心の寛さを兼ね備えているかということ。共同体への寄附金の額はすべて記録されている。
3. 貸付金として使用されていること。小額ならば、月1%の利子で借りられるようになっている。大きな額になると利子は（年利？）18%であり、事業の大規模な拡張などの際に利用される。誰に貸し付けるかを決定するのは村委員会で、審査は信用と返済能力について慎重に行われる。村基金の収支決済は毎年 Meetha で行われる。

村には9名のアマトレと呼ばれる村委員が4年の任期で、村の大小さまざまな事柄を決めているので、多額の融資を得るにはアマトレになるという方法がある。アマトレは僧院やストゥーパを建てたり、スタッフに給料を支払ったり、貸付けた基金を回収したりすることもその仕事に含まれている。非常に高い地位で責任も重い。そのため、この地位についた者は交易に予定どおり出られなかったりもする。

Meetha 以外にも【拠点】としての役割を果たすような、もっと小さな集まりがある。たとえば、遠足だ。

マナンギーは年に4回、（夫婦両方の合計）4組の祖父母のそれぞれの里を訪れる。3世代、姻戚関係も含めて、一族が集まるのだ。マナンギーは大家族なので、300～400人ほどの規模になることもある。どの一族も1人1人の結婚の記録を残しているし、結婚すればナンディのリストにも載っているはずだ。ナンディはこの一族の遠足のお世話もする。遠足は4回だ

から、毎年 4 組の夫婦がグティと呼ばれる一族基金を使って遠足を企画実行する。

遠足はだいたい 3～5 日ほど続く。飲み食いを共にし、おしゃべりに興じ、賭博を楽しむ。だが、ここでの賭けは大きな意味をもたない。ほんのお印程度にしか賭けることはない。遠足の主目的は社交だ。一緒にモモ（チベット餃子）を作りながら、バター茶を飲んで談笑するのだ。

グティの資金となるのは、寄附である。新たに結婚した夫婦は遠足用にくばくかの寄附をしなければならないことになっている。寄附金の額は任意だが、その金額は皆知るところのものとなる。それゆえ、できるだけ多額の寄附をするようになる。また、グティは貸付金としても使用されるので、その利子もグティの収入源となる。利子は（年利）12%である。

このような遠足も【拠点】として考えることができるだろう。祖父母自身が亡くなってからもしばらく故人を偲んで遠足が続けられることがあるので、その場合はまさにその故人が【拠点】となっていると言える。外国人女性と結婚してその土地に根付いたかのように見えるマナンギーの男にとっても祖父母は故郷にある【拠点】なのである。

遠足には、この他、女達だけのものや、既婚女性とその家族だけの集まりもある。これを「母親遠足」と呼んでいる。この場合は特に世話役を置かずに、みんなが平等に協力する。同様に男達だけの遠足もあるが、この場合は家族を巻き込まないのが、「母親遠足」との違いだ。

最後に「お宅訪問」について触れておく⁴⁴。これは義務である。しなければならないのだ。その役割の担い手は女達である。誰かが交易に出る前、あるいは交易から帰国したとき、病気になる時、赤ん坊が生まれたとき、結婚したとき、亡くなったとき、などなど、互いに訪問し合う義務があるのだ。その訪問は、互いの関係性の濃淡によって決まるが、マナンギーたちはこれを心得ており、簡単な訪問であったり、回を重ねた訪問であったり、実に色々である。たとえば、長い交易から帰国した折など、一週間は家に居なければならない。訪問者を迎えるためだ。直系から一番近い従兄弟までは必ず訪れて来るし、この他にも交易で生計を立てている仲間でもたまたまカトマンズにいたりする同業者の友人も訪ねて来る。夫が交易に出ていて不在だと、その妻が挨拶に来たりもする。そのたびに、彼の妻は時間帯によっては食事を出さなければならない。訪問客は帰る間際に無事の帰国を祝福するカタとビールを渡す。

病人が出ると、その家には親戚の者がモモとバター茶を用意して訪問する。これは病人に食べさせるためではない。見舞い客に振る舞うためのものだ。マナンギー共同体では、病人

44 前号の目次では「家族訪問」としたが、訪問先は親戚縁者だけではなく親しい友人も含まれるので、「お宅訪問」とした方がいいだろう（山本注記）。

には多くの見舞客が訪れる。たとえば、スレシュの母親が転んで膝を折ったときには、一週間に200人もの見舞客が訪れた。こういう不幸にはビールはもっていかない。代わりにインスタント麺やコココーラ、ジュースをもっていく。これは他の見舞客用にとの気遣いだ。マナンギー共同体ではビールは社会的交換価値の一種なのであり、これは女、お金、徳などと似ている。

結婚式と葬式に関しては、マナンギー共同体では、改めて告知する必要はない。ごく近い親戚に告げると、口コミであつという間に全員が知るところとなるからだ。

結論

マナンギー社会で価値あるものとされる能力は、【富を手放す力】と【分かち合う力】だ。これらの力に価値を置くことで、結果として、個々人に対してより大きな富がもたらされる。それはこれらが共同体内での再分配を促すこと、さらに共同体が外部社会の富を取り込むことで全体の富が大きくなる、という結果を導くからである。（共同体全体のパイが大きくなり、かつ共同体内部の再分配機能が働いているので、個人の取り分も成長していく）。しかし、富そのものもつ意味には限界がある。富とはより大きな目的のための手段にすぎない。より大きな目的とは、社会的なものや精神的なものである。

究極目標（非物質的なもの）について共同体全体が認識を共有していることと、その共通認識を現実化する具体的条件とが、さまざまな工夫、仕掛け（装置）を通し噛み合って機能している状態—それがマナンギー共同体である。

稼ぐという行為が、付き合いや政治や祭事のなかに組み込まれているということ。付き合いも政治も祭事も世代を超えて受け継がれ、互いに切っても切れないような関係にあること。それが社会全体を意味のある彼方へと導いていくのだ。

このような展開を進歩と呼ぶならば、ヨーロッパ経済史が描く単線的な歴史とは異なる複線的な進歩だ。ヨーロッパ人が貿易で蓄積した財とは異なり、マナンギー共同体の財は祭事という装置を通して流通する。その流れは遥かな距離を超えた広範囲に渡るものだが、そこに軍隊は介在しない。主権国家も軍も大資本といったものも介在せずに、時空を超えた営みが存在するのがディアスポラ共同体としてのマナンギー社会である。これはグローバル化する際の、もうひとつの選択肢ではなからうか。果たしてグローバルな自由経済では独占は不可避なのか？

長期間に渡る人の移動について見て来たが、ここでの問いは、グローバル化とは西洋的な貿易と技術の結果、生じた現象なのか、ということであった。人類学者がこの分野に貢献できることはまだまだある。

解説に代えて (⑤～⑦部分に関連して)

i) マナンギーのビジネス：非合法の世界

マナンギーの行うビジネス、とりわけ「交易」に関し、「この仕事には非合法ビジネスであるがゆえの危険が伴う」と簡単に記されている。その結果、「命の危険に晒されることもあるし、外国で獄中に繋がれることもある。実際、外国の刑務所で命を落とした者もいる」とされる。これは何を意味するのであろうか。本論の中に断片的に見える記述から、大まかに推測してみよう。

まず、「非合法の金の取引で稼げたのは1990年代初頭で終わった。というのも、インドが金の輸入制限を撤廃したためである」とあることから、1990年代初頭以前、インドが金の輸入制限を実施していた時代には、マナンギーたちはインドで金の違法取引を行い、それによって多額の利益を挙げていたことが伺い知れる。インドにおいて、金は富と繁栄の象徴であり、結婚式の際に花嫁が身に着ける装身具を初めとして、人々は金製品を不可欠のものとする。また、銀行を利用する預貯金の普及が限定的であったため、金は価値保有手段としても重視された。これらの理由から、伝統的にインドは世界有数の(時期により異なるが、しばしば最大の)金需要を誇ってきた。他方、インド国内における金生産量は限定的であるため、主に輸入に頼ることになるが、金の輸入には大量の外貨を消尽することになる。そのため、インド政府は金の輸入制限を続けてきた。需要は大きいのに、供給を絞るのであるから、供給不足になり、価格は高騰する。それゆえ、いかなる方法であれ、インド以外の国・地域からより安価に金を調達し、それを供給すれば、確実に売りさばけた。しかも、金は、重量こそあれ高は小さく、その上、高額商品であるばかりでなく内外価格差が大きい。まさに密輸に最適の要素を備えていた。こうした理由からマナンギーたちは金の密輸ビジネスに携わっていたのであろう。しかも、「金でなくとも、宝石や工芸品であっても」云々とあることからすれば、金を中心的に扱っていたと推測される。今も世界各国で入国の際に記入する税関申告書には、輸入制限がない場合でも、一定額以上の現金または貴金属を所持する場合には、それを自己申告する欄があり、申告せずに持ち込んだことが発覚すれば没収ないし刑事罰の対象となる。まして、輸入制限があった時代のインドで(マナンギーたちの分布から考えると、恐らくは東南アジア方面から)金を大量に密輸入すれば、重大な刑法犯と見なされたことは間違いない。うまく見つからずにインドに持ち込めれば多額の利益が上がるが、下手をすると没収どころか刑事罰で長期収監は免れない。彼らは、こうした極めてリスクなビジネスを行っていたと考えられる。ただし、先の文面通りなら、インドで金の輸入制限が撤廃された1990年代初頭以後には、金のビジネスは旨みがなくなって稼げなくなっ

た、そのため彼らは金の違法取引から撤退した、とも読み取れる。しかし、実のところどうであろうか。筆者（高田）はバングラデシュを主たる研究対象としているが、同国では2014年現在も、中東方面から大量の金の持ち込みが発覚し、摘発される事件報道が度々なされる。バングラデシュほど詳しくフォローしているわけではないが、インドでも同様の事件は継続的に発生しているようである。つまり、輸入制限撤廃後も、以前ほどではないにせよ内外価格差は存在しており、金の密輸ビジネスも継続していることになる⁴⁵。とすれば、以前ほどの規模ではないとしても、マナンギーたちの関与は続いている、と考える方が合理的ではなからうか。

さて、「金でなくとも、宝石や工芸品であっても、基本的に非合法ビジネスである以上は危険が伴うことには変わりはない」とあることから、彼らの主要取引品には金以外に宝石や工芸品もあることが分かる。次に、これらについても触れておこう。

宝石については、文中の各所に彼らが宝石ビジネスを行っていることを示唆する表現が散見されることから、彼らの主要取扱品の一つであることは疑う余地がない。しかし、不思議なことに、ビジネスの実態を示す記述は極めて少ない。まずは、例外的なエピソードとして、2つの言及があるから、そこから考えてみたい。1つはチェサン・バの事例の中に見られる事件である。彼は「1962年の（当時ビルマの）クーデターのとき、ビルマの宝石採掘場で稼ごうと思っていた彼と48人のマナンギーは、宝石をこっそり国外へ持ち出すことにした」。方法は「二重底の籐の鞆を作り、そこに入れて運び出す」というもので、さらに自分たち「49人分の宝石とカルカッタから来ていたマルワリ商人の20万ルピー相当の宝石を隠した。うまくいったらマルワリから4万ルピーをもらう約束」だったようだ。結局、自分たちだけで持ち出すのが難しいことから、インドとビルマ国境地域で越境ビジネス（主に密輸）を主業とする現地民ナガの人々の助けを借り、インドに持ち込むことに成功した。こちらは、本物（恐らくは高級品）の原石を非合法で密輸し、高収益を上げる方式である。扱う品物が異なるだけで、基本的には金の密輸の場合と同じ方法であることが分かる。

もう1つはチャブン・バの事例で、カチン州のモゴ（モゴク）にある鉱山から原石を直接買い入れ、それをラングーンに持って行き、短期間に「偽物の石を混ぜて」売り抜ける、との例である。こちらは、本物の原石（高品位の原石）に偽物の石（恐らくは低品位の原石）を混ぜて、それをビルマ国内の異なる土地に運び、よそ者である「イギリス人やジャワから来た連中」に売り抜ける、という方法である。これは密輸ではなく、一種の詐欺的な手法、

45 Al Jazeera の英語版で、最近“Bangladesh sees sharp rise in gold smuggling”と題するビデオの放送があった（www.aljazeera.com/video/, 2014年8月2日）。金の密輸がバングラデシュで急増しているが、大半はインド向けであり、インド政府が金の税率を上げたことが、この急増のきっかけだ、とのこと。だとすれば、両国の密輸は、密接に関係しているのであろう。そこにマナンギーが関与しているのかどうか、気になるところである。

と考えられる。ただし、マナンギーたちの弁護をしておけば、この種の手法を取る宝石商は世界中にいる。と言うよりも、宝石ビジネスの世界自体が、この種の詐欺的商法と渾然一体とした特殊な業界である、と言うべきなのかもしれない。

金や宝石、いずれの場合にも、彼らのビジネスは非合法の色合いを強く帯びている。それゆえ、通常の商売の常識だけでは通用しない、かなり独特の世界と考えられる。また、極めて投機的な取引きであることも容易に想像がつく。そのためには通常の商売とは異なる、特殊な商売のやり方を身に着ける必要がある。文中で「マナンギー共同体のなかでは教育の効用について賛否両論ある」と通常の学校教育への批判的な見方が示され、それと対比する形で「交易については父親や親戚の年長者などから見よう見まねで学ぶ」とあるのは、こうした商売には特殊な学習法が必要であることを示唆する。では、どのような学習方法なら有効なのか。それは具体的には賭け事を通じた学習方法、ということのようである。「大人は子どもに賭けを促し、教え、指導する」。このトレーニングを続けることで、「マナンギーの子どもたちは小さい頃からリスクをとることを叩き込まれる」が、同時に「【リスクを分かち合う】こと」、つまりはマナンギー同士が助け合うことも学ぶのである。まさに「それは【国外で交易をするのに必要な態度】」なのであろう。かなり極端な教育方法のように見えるが、彼らの特殊なビジネス形態を考えると、それが最も合理的な習得方法であるからであろうか。

ただし、マナンギーが宝石に関して、主に原石のみを取扱い、しかも密輸や詐欺商法的方法でだけ商っている、と即断することは慎まねばならない。なぜなら、興味深い記述が見られるからだ。マナンギーが交易を止めて外国で定住する際の投資先の一つとして「宝石加熱（加工）工場（gem heating factory）」に触れた部分がそれである⁴⁶。宝石ビジネスでは、言うまでもなく良質の原石を得ることが最大のポイントになる。しかし、同じ原石でも、その後の加工により大幅に価値が変わる。この加工方法には、大別するとカットと加熱（加工）があるようだ。カットは良く知られているように非常に高度な技術を要するため、原石の中でも上質の物に関して重視される。他方、加熱は、原石の中でも比較的品位の落ちるものを加熱加工することで（これ自体、かなりの技術が必要であることは確かだが）主に発色を調整し、価値評価を向上させることを狙うのである。この加熱加工過程にマナンギーが進出しているということは、彼らの宝石ビジネスが加工段階にも広がっていることを示す。それだけではない。シンガポール等に触れた部分では彼らが宝石の小売りビジネスにも携わっている様子が伺える。ここで重要なのは、もう一つの商品が「工芸品」であることだ。文中で工芸品取引き自体の詳細に関する記述はほぼ皆無である。ただし、カルマ（テンジンの弟）

46 筆者は宝石関連には全くの門外漢である。ここで記すのは、筆者が調査の過程で聞きかじった半端な知識と、それに関連して若干調べた範囲による、と予め断っておく。

の事例で「宝石の取引は難しかったんで、兄が銀の工場を始めたとき、そこを手伝うことにした」とあること、さらに、「マナンギーが交易から定住生活へ移行するとき、……外国に定住する場合は、銀製装身具工場や……」とあるところからすると、ここで工芸品と呼ばれているのは、恐らく銀製品（英語で silver ware と呼ばれる銀の食器や、装身具等）を中心とする、嵩が小さく比較的高額な商品だと推測される。実は宝石ビジネスとこの銀製品ビジネスは、多くの場合、小売り段階、もしくはその前段階から一体のものなのである。宝石は宝石自体の加工を経ると、次いでそれを何らかの製品（装身具等）に仕立てるプロセスが続く。多くの場合、そこでは金、銀等を用いて精巧な細工がなされ、それが指輪や腕輪、イヤリング、ネックレス、さらには宝石箱のような高級細工品として完成するのである。この部分は直接には金細工、銀細工の職人が行う。しかし、その完成品である宝石や銀製品は、卸売や小売り段階ではしばしば同一の業者が同一の店舗で扱うのである。つまり、原石の採掘こそしないものの、原石を鉱山周辺で買い付けるところから始まり、その運搬、加工、小売りに至るまで、宝石ビジネスのほぼすべてのプロセスにマナンギーが携わっていることが分かる。この中で違法性が高いのは原石の持ち出し過程だけで、他の部分（原石の買い付け、加工、卸売、小売）はまっとうなビジネスを行っている可能性も高いのである⁴⁷。

ii) マナンギーのビジネス：合法の世界

マナンギーが非合法ビジネス（または、かなり非合法に近いビジネス）から合法ビジネスに移行するきっかけについては、要約すれば非合法ビジネスゆえの危険性、リスクに嫌気がさすことが要因として挙げられている。ただし、故郷のマナン渓谷に戻るきっかけとして言及されている「交易がはかばかしくなく資金が不足している場合」や「長年一緒に交易してきた相方が亡くなったり、投獄等の嫌な経験に遭遇した場合」等も大きな理由になるようだ。このうち、資金不足の場合は、故郷に帰ることを余儀なくされるが、それ以外の場合には様々な選択肢がありうる。ビジネスを行う場に注目して言えば、そこに明らかな違いがあることが見て取れる。外国（＝交易でマナンギーたちが海外に展開する主要な場、例えば、シロン、バンコク、クアラルンプール、シンガポール等）に居住する場合には、非合法ビジネスの延長上で「銀製装身具工場や縫製工場、宝石加熱（加工）工場」等を経営することが多いことが示唆される。他方、ネパール国内の場合、カトマンズなら「ホテルやカーペット工場、旅行会社、野菜の種の輸入ビジネス」に、マナン渓谷では「ロッジ建設、家畜購入」等に投資

47 ただし、グレーな部分が残るのは確かである。例えば、筆者がバンコクのあるマナンギーの聞き取り調査に同行した際、その男性（宝石、銀製品の卸売商）は、買い付けに（大口の）客が来るのは1日に1組程度、と語っていた。しかも、その全てが成約するとは限らないことからすれば、成約に至る取引はかなり大掛かりなことが推測される。とすると、そこでは高度な駆け引きが行われるのは、容易に推測される。しかし、それも商売の一部であろう。

し、新たなビジネスを展開すると記されている。この違いは、なぜ生じるのであろう。

海外では、どこでも厳しい競争環境が待ち受けている。とりわけ、マナンギーたちが分布居住するインドないし東南アジア諸国の場合、個人商店や少人数で行うビジネスを考えようとすれば、多くの分野で、前者では現地のインド人商人、後者では華人商人という、世界に名だたる商売上手が競争相手として立ちふさがる。他方、マナンギーたちがある程度、資金を持っているとはいえ、彼らの持つ資本は大規模ビジネスを行えるほどの額ではありえず、また、そもそも彼らはそうした会社組織的なビジネスには向いていないらしきことが示唆されている。とすれば、自分たちが十分に知識も経験も持ち、厳しい競争環境であっても勝ち抜く（少なくとも生き残る）可能性が高い分野という、やはり宝石や工芸品関連ということにならざるをえないのではないか。

他方、ネパールに戻れば話は別である。まず、宝石関連で言えば、そもそもネパールにおいては海外で行っていたほどの規模のビジネスチャンスを見出すことが難しい。地元の人々の購買力には限りがある上、海外（主に欧米）から来訪する買い付け人は、バンコクやラングーン、またはシンガポール等へ真っ直ぐ向かってしまうからである。他方、マナンギーたちが蓄積した程度の資本でも、ネパール国内であれば、一定規模の価値を持ち、新たなビジネスを立ち上げることに支障はない。また、ネパール国内に戻れば、彼らは自国であるために海外の場合のような外国人としてのハンデを負う必要もなくなる。その上、海外での厳しいビジネス環境に鍛えられ、なおかつ、広い世界と多様な外国人旅行者の好みを知るという彼らの特性は、ネパール国内に留まる一般の人々に比べれば、新規ビジネスを始める際に大きな強みになる。それゆえ、国外で行っていた宝石ビジネス等とは全く異なる分野であっても、新規のビジネスを立ち上げ、成功に導くことに、ほとんど支障はないと考えられる。しかも、彼らには独特のマナンギー・ネットワークがあり、必要な場合には助言も資金面での協力も見込める。実際、今ではカトマンズに定住したマナンギーの方が多いと記述もあり、成功者は多数いると推測されることからすれば、彼らが首都カトマンズで新規ビジネスに参入することは合理的選択ともいえる。同時に、故郷のマナン渓谷ではトレッキング目的の外国人観光客相手のホテルを立ち上げている。海外生活を暮した経験から、一方で外国人相手のビジネスに慣れていること、他方では、世界的な動きからトレッキング関連の分野ではこれまで以上のビジネスチャンスが見いだせると考えていること、こうした事情が彼らの動きの根底にはあるようだ。彼らの故地であるマナン渓谷はネパールの中でもかなり辺境ではあるが、彼らの選択は現在のグローバル化した世界を色濃く反映したものになっている。

以上のような条件と環境の違いが、マナンギーたちが合法ビジネスに移行する際に選択する職種、ビジネス形態の違いに反映するのではないかと考えられる。

iii) 交易ルート

文中の記述は、その大部分に時間的な特定がなく、時代による変化等が極めて把握しにくい。とはいえ、いくつかの事例や証言をつなぎ合わせると、彼らの行う交易のルートが、時代の変化と共に、大まかに浮かび上がる。

例えば、チェサン・バの事例では、1922年生まれの彼が18歳の時（=1940年）にカルカッタへ出たこと、アッサム（可能性が高いのはシロン）で米軍相手の商売をしたこと、その後（=第2次大戦後）ビルマで宝石取引に従事、具体的にはモゴ（=モゴク、ビルマ北部カチン州の町、高品質のルビー産地として有名）で原石を仕入れタイ国境の町タチレクで売ったこと、さらに1950年代にはネパールやタイのパスポートを入手し、ラングーンやバンコクで商売を行っていたこと、その後、バンコクに定住し、ラングーン、バンコク、マレーシア（クアラルンプールないしまラッカ）、シンガポールを移動しながら交易したこと、等々が語られている。つまり、大まかに言えば、第2次大戦中まではネパールとインド（主にカルカッタやシロン）を行き来して交易していたのが、ビルマ独立後から1950年代までは主にビルマ国内を中心に活動の場を移し、その後（恐らくはビルマが軍政になってから後）はタイのバンコクをベースにしてビルマからシンガポールまでを活動範囲に手広く交易を行っていたこと、しかし、それも1960年代末（まだ40代半ば）で引退し、故郷に戻って隠棲したまま現在に至ることが把握できる。

同様に、チャブン・バの事例では、シロンのマナンギー横丁を拠点に、インド東北部から葉草やジャコウ鹿（のじゃ香）を、ビルマ北部メイミョー（ビルマ中北部マングレー管区のシャン高原に位置する英領時代の避暑地、現在のピン・ウー・ルイン）やモゴからは宝石を持ち込む。それをカルカッタ経由、海路でシンガポールに運び、シンガポールで売りさばく。これは、前後の文脈から考えると、第2次大戦前から直後のことのようなのだ。その後、1960年前後にはメイミョーに居住し、モゴで宝石を買い付け、ラングーンで売りさばく。「チャブン・バの交易は、北ボルネオからタイにまで及び、シロンの家族に送金を続けた」とあるから、1960年代には、ビルマ北部を拠点に、インド東北部からタイ、さらにはボルネオ北部にまで活動範囲を広げて動き回っていたことが確認できる。彼の場合には交易をやめてから約30年とあるので、1970年代末には故郷に戻ってきていることになる。

前回（論文の前半部分）の範囲では、ネパールからバンコク、クアラルンプールないしまラッカを越えてシンガポール、というのが彼らの活動地域として強調されていた。しかし、後半部分、特にこの2人の事例から明らかになるのは、彼らの動きがそれ以上に広範囲に渡っていることである。国名で言うと、ネパール、インド、ミャンマー（ビルマ）、タイ、マレーシア（ボルネオ北部を含む）、シンガポール、少なくともこれだけの国を股にかけてビジネスを行っている。しかも、大都市中心の点と点を結ぶ動きではなく、もっと面的な動きのよ

うである。さらに、最近でこそカトマンズ、バンコク等の重要性が高まっているものの、第 2 次大戦後から、インドで言えばインド東北部で外国人立ち入り禁止措置が取られていた時代に、ビルマで言えば独立後の混乱期から軍政期に、つまりは、いずれも常識的な感覚から言えば極めて移動が制限されていた時代に、あえてアッサム（後のメガラヤ）のシロン、ビルマ北部のメイミョーを拠点にしてビジネスを行っていた点は注目に値する。国境や当時の政治社会環境を無視して彼らの動きを眺めるならば、彼らの行動は極めて合理的である。地図上で、一方にネパールのマナン渓谷を北西に印付け、他方でシンガポールないしボルネオ北部を南東に印付けて、その広がりを眺めてみれば、シロンやメイミョーは、中心に近い。とりわけ、メイミョーを含むビルマ北部は、ネパールからインド東北部を経由し、ビルマ北部からタイ北部経由バンコク、マレー半島経由でシンガポール、というマナンギーの活動空間の中で、まさに中心に位置する。私たちは表面的な政治経済の動き、国境で区切られた国単位の大きな動きに幻惑されがちだが、マナンギーのビジネスと、ビジネスに絡む移動ルートを見ると、これまで常識視されていた空間認識（とりわけ、「南アジア」と「東南アジア」という区分）を根本から見直す必要がある、と改めて思い知らされるのである。

以上の諸点以外にも、彼らの信仰とコミュニティ維持のメカニズム、財の吸い上げと再分配、そこに賭け事を介在させること、等については非常に興味深い点多々あるが、紙幅の都合上ここで論ずることはできない。いずれ改めて、ネパール系移民について独自の論考をまとめる際に、可能な範囲で取り上げることにしたい。

なお、著者は、この博士論文を部分的に要約した形で、以下の論文を発表している。(RATANAPRUCK, Prista, 2007, “Kinship and Religious Practices as Institutionalization of Trade Networks: Manangi trade communities in South and Southeast Asia”, *Journal of Economic and Social History of the Orient*, 50-2-3, pp. 325-346.)